八戸藩に於ける打毬（第一報）

弘前大学 岩岡豊麻

打毬は飛鳥時代（640年前後）蹴鞠と共に中国より我が国へ移入したものであるが、蹴鞠は主として貴族上流階級の人達の間に行われ、打毬は武士階級に流鏑馬笠懸犬追物等の武芸と共に Recreation Sports として発達した。

鎌倉時代より室町時代にかけて、打毬の行われた記録は殆んどない。これはこの時代の武芸は直接軍事的目標に求められ、その内容として実戦的好戦の気分に満ちた武芸が其の対象とされ、Recreation Sports である打毬は顧みられなかつたものと思われる。

打毬は最も盛んに行われたのは江戸時代中期（第八代将軍吉宗の頃）であり、各藩の間で夫々他の武術と共に盛んに行われたようである。この時代の武術は単に軍事的目標のみに対するものでなく、むしろ「治不忘乱」という武士の教養としての目標に求められた。これは徳川の築いた封建社会の治世が全くなり、国内の平和が打統いて武士達は直接軍事的な位置から解放されたためと言ふことが出来よう。

八戸藩の打毬はこの時代を背景に、この時代の武術の目標に創められた。即ち文政10年第八代藩主南部信真が最初の打毬師範者として藩士の野村武一へ与えた免許状に

騎馬臨戦場者無不取弓炮刀鎗薙刀雖然常
不得其術則不能左右之還有害其身者焉
大樹吉宗公治世慮失其利而撰定馬上打毬
之法平生使迄臣弄之其法至干今盛也
夫治不忘乱者誰違於大樹君之聖志乎是故
附家流騎射欲永令家士学之者也候
文政戊子年三月十有五日

源 信真 印

野村 武一

とある。

而して今日尙行われているこの打毬を藩祖（新羅三郎義光）を祀る新羅神社境内の馬場（通称長者山桜の馬場）に於て祭典当日の七月二十一日其の第一回を開いたのである。即ち藩政時代御用人所で書いた八戸藩日記（全八百数十冊八戸市番町上杉氏所蔵）の一冊、文政十年從二月至十二月に、

閏 六月八日

一、御目付ヨリ申渡左之通り

当年ヨリ法靈三社堂（註藩政時代の^{新羅神社}）七月九月御祭事之節於長者山馬場歩射騎射之法並打毬興

行御番士特ニ被仰付候尤惣家中次三男迄修業次第相
加候儀勝手次第之旨仰出候云々

とあり、打毬開催の時期、場所及び出場者の資格について書いている。

更に 七月二十一日には

一、長者山御族所ニ於テ法靈参拜、夫ヨリ御棧敷江被為
入御先詰当役御機嫌伺云々

一、打毬相済候処及暮候ニ付篝火被御付云々

とあり、打毬開催にあたって着席してから競技開始の有様や観戦中の模様を記載している。

今日この打毬はこの神社の祭典競技として受け継がれ、打毬技術及び関心の程度に依つて一般市民の自由意志に依つて参加することが出来るが、この時代は勿論明治になつてからも他の武術のそれのように厳しい身分や地位を伴う秘伝々承による免許制度があり仲々競技への参加は許されなかつたのである。

競技規則は今日の欧米スポーツに見るボールゲームのルールの細分化されたものではなくむしろ武士道を包括し競技者の人格や教養によつて規制し、しかも競技進行や運営に至るまで一定の形式や技術が伴いこれもすべて秘伝々承を必要とするものであつた。即ち打毬師範者が競技々術の優れた者に与えた免許状に附して贈つた免許、打毬之巻、打毬役付之巻打毬諸具之巻の夫々の巻尾には何れも

右打毬秘事書伝之者也悉不受口授者難明其理云爾
とある。

問 八戸藩に於ける打毬は馬術の流派との関係はなきや
(佐賀大・黒木)

答 打毬、流鏑馬、笠懸等騎馬を用いて武術に際しての馬の取扱ひには厳しいものがあつたように見受けられる。

問 1) 打毬と馬術は表裏一体のもの（馬・人員の損傷並に場所）であるが八戸に於ては如何。 2) 現在ソフトボールを使用とのことであるが昔の毬と比較し競技運営に関しては如何。
(慶大・笹島)

答 1) 藩主の与えた免許状の内容からすれば馬術が対象であり中国のそれのように競技場とか馬に対するねらいは見出されない。 2) 打毬に専念する競技者、打毬に精通する専門家を失つた今日、毬の作成法も知らない有様であり、且競技者は当日だけの即興的競技への参加であるので、ソフトボールと正式の毬の使用による相違はむしろ知る事が出来ない。